
【主題】

歴史総合「歴史の扉」における自校史活用の試み

【副題】

主体的に歴史学習に取り組もうとする態度の育成を目指して

【学校・団体名】宮城県小牛田農林高等学校

【役職名・氏名】教諭・鈴木崇之

1 はじめに

令和4年度より高等学校において新教育課程が実施され、地理歴史科の新科目である歴史総合がはじまった。内容を見ると、四つの大項目（大項目A「歴史の扉」、大項目B「近代化と私たち」、大項目C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、大項目D「グローバル化と私たち」）で構成されている。ここで特徴的なのは「～と私たち」という表現である（大項目A「歴史の扉」においても、中項目（1）「歴史と私たち」に同様の表現がある）。取り扱い順序は、大項目Aから大項目Dへと定められている。また、同じく新科目の日本史探究、世界史探究については、これらの前に歴史総合を履修することとされている。つまり歴史総合の大項目A「歴史の扉」は、高等学校の歴史学習全体の導入を意味する重要なものである。地理歴史科の目標を見ると「広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な資質・能力」の育成が掲げられている。これは単に知識として歴史を学ぶだけでなく、歴史を学ぶことを通してこれからの社会の担い手としての自覚を促すことを企図するものであり、「～と私たち」という表現はそれを象徴するものだろう。

上記のような目標をいかにして達成するか、そして歴史学習全体の導入として効果的な「歴史の扉」はどういったものか、試行錯誤を重ねていた。そのような折、学校図書館を整理していると（筆者は司書教諭の業務も担当している）、学校の記念誌や数十年から百年以上昔の卒業アルバムを発見した。これらの資料は、歴史と現在の生徒を結び付ける有用な教材となり得る。「～と私たち」という表現にあるように、自校史を通して歴史と自分とをつなげて捉えることができれば、歴史を主体的に学ぶための契機になると考えた。

2 研究のねらい

高等学校における歴史学習全体の導入を意味する歴史総合「歴史の扉」において、主体的に歴史学習に取り組もうとする態度の育成を図る。そのための一方策として、自校史の有効な活用方法を探る。

3 対象生徒

勤務校は農業技術科と総合学科が併置されており、実践は令和5年度の総合学科第一学年（120名）を対象とした。

実践の前に「歴史は好きか・嫌いか、またそう思う理由は何か」というアンケートを行った。結果は肯定的回答（好き・どちらかといえば好き）が58%、否定的回答（嫌い・どちらかといえば嫌い）が42%でおおよそ半々に分かれた。否定的回答の「そう思う理由」は、「人や出来事がたくさん出てきて覚えられない」といったものであり「歴史は暗記もの」という捉えがうかがえた。一方、肯定的回答の「そう思う理由」は、「歴史が現在の自分たちまで続いてきており、さらにその先までつながっていくことを考えると面白いから」といったように、自分自身や身の回りのことと歴史のつながりを捉えたり、歴史の中に自分自身を位置づけたりする表現をするものが多くあった。

4 研究の実際

主体的に歴史を学ぶためには、上記の否定的回答の理由のような捉えではなく、肯定的理由のような捉えが必要である。そこで、大項目A「歴史の扉」において、以後の歴史学習に主体的に取り組める契機とするため、自校史を教材として有効活用することで自分自身と歴史のつながりを考察させることとした。大項目A「歴史の扉」は二つの中項目{(1)「歴史と私たち」、(2)「歴史の特質と資料」}からなる。ここでは、それぞれの中項目で行った実践について述べる。なお、生徒は勤務校のことを「小牛田農林」と略称で呼ぶことが多く、授業のプリントもそれに合わせて作成した。以下、本稿においても同様の表現を用いた。

(1)「歴史と私たち」～小牛田農林のあゆみをまとめよう～

「歴史と私たち」は、高等学校における生徒と歴史の出会いの場面であり、自分たちの生活や身近な地域などに見られる諸事象が、日本や日本周辺の地域及び世界とつながっていることを理解することを目標としている。本校は創立を1888年とし、その歴史は第一次

世界大戦はもちろん、ソ連の成立や大日本帝国憲法の発布より古い。そこで中学校で学んだ歴史を振り返り、小牛田農林の歴史と重ね合わせ、年表を作成させた。

①学習記録シートの記入（授業前）

生徒の授業前後の変化を見取るため、図1のようなシートを作成した。シートの左側に授業【前】を、右側に授業【後】を書かせ、それぞれ対応するようにした。

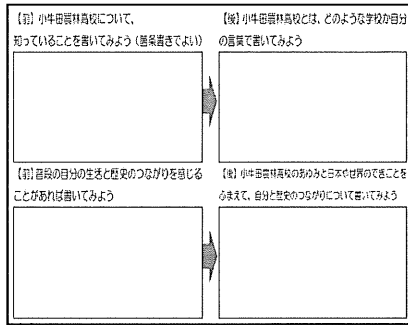


図1

【前】小牛田農林高校について、知っていることを書いてみよう～主な記述～

- ・学科やコースに関すること（農業の勉強ができる、自分の将来にあわせて勉強できる、資格取得など）
- ・部活動に関すること（全国レベルの大会に出場していることなど）

【前】普段の自分の生活と歴史のつながりを感じることがあれば書いてみよう～主な記述～

- ・モノに関すること（ガラケーからスマホへの進化など技術の進歩）
- ・慣習に関すること（年中行事や伝統芸能など）

学校についての認識は、ホームページ等で知り得る情報から挙げている生徒が多かった。自分自身と歴史との関わりとしては、モノや場所、慣習など、具体的に目に見えるものを通して意識する傾向が見られた。

②年表の制作

本校ではおおよそ10年ごとに記念誌を発行しており、直近の130周年記念誌では年表の形で本校のあゆみがまとめら

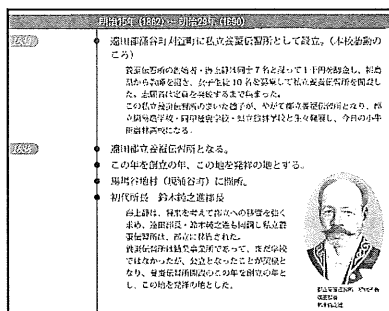


図2

れている（図2）。また、使用している教科書（第一学習社『高等学校 歴史総合』）にも、世界の各地域と日本について、人類の出現からロシアのウクライナ侵攻までの年表が掲載されている。これらを用いて、本校の歴史について1882年（前身である私立養蚕伝習所の創設）から2023年（令和5年度入学式）までを穴埋めの形で整理させ、それと対応するように教科書の年表から自分が知っている（聞いたことがある）単語を「日

本のできごと」と「世界のできごと」に分けて抜粋させ年表にまとめさせた。例として取り上げた次の年表（一部抜粋）のように、特に大日本帝国憲法の発布（1889年）を「日本のできごと」の始点として書いている生徒が多く、中学校で学んだ内容の中でも印象が高いことがうかがえた。本校の歴史がそれより古いことを知ると、驚きの声があがっていた。

年	小牛田農林高校のあゆみ	日本のできごと	世界のできごと
1882	（私立養蚕伝習所）として設立。	1889 大日本帝国憲法発布	1882 三国同盟
1888	（専ら制虫養蚕伝習所）となる。創設の年。	1894 日清戦争	1884 ベルギー会議
1902	（校歌）・校旗・（校章）制定。	1900 日露戦争	1800 養和国書件
1910	（宮城県立小牛田農林学校）と改称。（科）科新設。	1905 日露戦争	1914 第一次世界大戦
1917	（理田農産）が全線開通。	1915 二十一年戦争	1921 ワシントン会議
1942	本校同窓生18名の（戦死）者を偲び、慰霊祭執行。	1923 関東大震災	1937 日中戦争 1939 第二次世界大戦
1944	3年生徒全員が（北海道農業幹部養成所）として出動。	1945 広島・長崎 原爆	1945 戦後、国際連合

③学習記録シートの記入（授業後）

授業前に対応させる形で以下の設問に取り組みさせた。

【後】小牛田農林高校とはどのような学校か、自分の言葉で書いてみよう～生徒の記述の抜粋～

- ・戦争や地震があっても、時代の変化にあわせて進化してきた学校。世界や日本とともに歴史を歩み、多くの出来事を乗り越えてきた学校。

【後】小牛田農林高校のあゆみと日本や世界のできごとをふまえて、自分と歴史のつながりについて書いてみよう～生徒の記述の抜粋～

- ・過去多くの戦争があり、それを乗り越えて今があると感じた。自分も教科書に載るような東日本大震災や新型コロナウイルスの流行を経験しているので、この経験を次の世代に伝えたい。
- ・自分が通学に使っている電車は1917年に全線が開通し、その年にはアメリカが第一次世界大戦に参戦していることが分かった。そう考えると、長い歴史と自分がつながっていることに気付いた。

学習後の記述で目立ったのは、「私」や「自分」という表現が多くなったことである。中学校までに学んできた日本や世界の歴史と本校の歴史を結び付け、そこに創立135年目の入学生として自分を位置づけることで、歴史とのつながりを実感することができていた。また、祖父母や曾祖父母が本校の卒業生であるという生徒がおり、自分の上の世代の学校生活や当時の社会について話し合う様子も見られた。

④授業の感想を書こう

生徒の記述では、以下のようなものがあった。

- ・創立135年と聞いてあまり実感がなかったけれど、歴史とあわせることで「そんなに昔から続いているのか!」と、感動した。一番印象にあるのは、本校の卒業生が戦争で亡くなったことで、今の生活は当たり前前ではないと思った。
- ・私の曾祖父も小牛田農林の卒業生です。なんだか不思議です。私がおばあちゃんになるまで続けてほしい。

先述のアンケートのように、生徒は自分自身と歴史とのつながりを見出すことができると、歴史に対して肯定的に捉える傾向がある。これらの記述から、歴史学習の第一歩としての効果があったと考える。

(2)「歴史の特質と資料」～卒業アルバムを読み解いてみよう～

勤務校の学校図書館から、太平洋戦争がはじまった1941年(昭和16年)の卒業アルバムを発見した。ページをめくると当時の在校生にも開戦の影響が見られる箇所があった。「歴史の特質と資料」では、様々な資料に基づいて歴史が叙述されていること、複数の資料を読み取り、情報の意義や特色などを考察することを目標としている。前時では、自校史を通して自分自身を歴史の中に位置づけさせた。さらに本時において開戦当時の卒業アルバムを授業の導入として取り上げることで、資料の読み取りと併せて、歴史と自らのつながりをより深く感じられるようにした。

①歴史資料にはどのようなものがあるか

まずは歴史資料に目を向けさせるため、歴史はどのようなものを根拠として叙述されているか、授業を受ける前のイメージを書かせた。生徒の記述では以下のようなものがあった。

日記、手紙、伝承、写真、絵画、伝統文化、新聞、武器、体験者の話、映像、骨、城、古墳、貝塚等

筆者は普段、授業の導入で「～と思いますか?」と問いかけ、ワークシートに記入させることが多い(その後振り返りを行い、主体的に学習に取り組む態度を評価している)。勤務校では、学習全般に苦手意識をもって入学してくる生徒が少なくない。導入段階で知識の有無を問うと、尻込みしてしまう様子がよくみられる。そこで「～と思いますか?」という聞き方をすることで、心理的ハードルを下げられるようにした。

②卒業アルバムを読み解く

資料1・2は、1941年の卒業アルバムの一部である。これらを示しながら、以下のように授業を展開した。
○発問:資料1は、1941年の卒業アルバムの編集後記です。傍線部「世界史に特筆すべき飛躍を遂げた昭和十六年を終へると共に我等は卒業した三ヶ月短縮された卒業期のために～」に注目してください。なぜ、1941年(昭和16年)の生徒は三ヶ月早く卒業したのか、そのきっかけとなった「世界史に特筆すべき飛躍」とは、何だと思えますか?(□は太平洋戦争について言及しており、生徒に提示する際は空欄の状態)



資料1

●生徒の予想と反応:

真珠湾攻撃により太平洋戦争がはじまったため。

資料を提示した途端、生徒の目が一気に引き付けられた。卒業アルバムという資料の性質や、資料の一部を見えない状態で提示したことが効果的だったようである。前時に作成した年表の1941年の箇所に注目させ、太平洋戦争があったことを確認させた。歴史的事象が、先輩である当時の本校の生徒に影響があったことについて、周囲の生徒と話し合う様子が見られた。

○発問:資料2は、先ほどと同じ卒業アルバムの別のページです。写真の中の□に入る語句は何だと思えますか?(□は「米國」であり、続く言葉は「何者ぞ」である。生徒に提示する際は空欄の状態)



資料2

●生徒の予想と反応:

敵艦、米英、米兵、米軍、等

戦争について考えをめぐらせ様々な国をあげる生徒がいた。「米國」と答えを提示すると、口々に「やっぱり！」というような声があがった。次に資料2の新聞記事の箇所を拡大し、その見出しから戦況を読み取らせた。記事からは開戦当初日本が勝利を重ねていることが読み取れる。そして教科書や資料集を確認させ、読み取った内容と新聞記事の状況が一致していることに気付かせた。ここまでのまとめとして、卒業アルバムや教科書を通して当時の社会状況について考えられることを整理させた。以下はその記述の抜粋である。

・戦争がはじまり平和とは言えない状況であったが、勝利を重ねていたことから、このまま勝てると意気込んでいたのではないかと。

③戦争とマスメディア

新聞記事が当時の様子を知る手掛かりとなることを意識させた上で、資料3



資料3

(ミッドウェー海戦の

戦況を伝える新聞記事)を提示した。資料を読み取らせ、教科書や資料集でミッドウェー海戦についての記述を確認させた。記事によると日本は優勢であることが読み取れるが、実際とは異なっている。生徒の反応は、「開戦当初勝っていたときは卒業アルバムに掲載された新聞のような正しい記事が書かれ、戦況が悪くなってから間違ったことが書かれるようになったのはなぜ?」と違和感を口にしていた。そこで、メディアと規制について触れ、資料が必ずしも正しいわけではないことに気付かせた。これをふまえて、当時の社会状況をワークシートにまとめさせた。以下は生徒の記述の抜粋である。

・実際は不利な状況だったが、マスメディアは社会に大きな影響を与えるため、戦争継続に不都合なことは報じられず、正しい情報を得ることは難しかった。

④まとめ

まとめとして、歴史資料を読み解く際に気を付けるべきことを書かせた。以下は生徒の記述の抜粋である。

・必ずしも資料が正しいというわけではないので、他の資料と読み比べたり、当時の社会の状況を考慮したりする必要がある。
・今日見たものは日本についてのものばかりであったが、同時に他の国の資料とも照らし合わせる必要だと感じた。

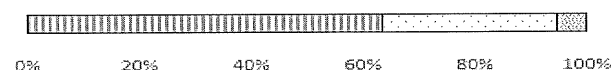
資料の読み取りには高い集中力を要し、一時間継続して行うことには難しさがある。しかし生徒の関心の高い教材を導入として活用することで、多くの生徒が真剣に授業に取り組む様子が見られた。

「歴史の扉」のまとめとして、私たちの生活も含めて現代は全て歴史とつながりがあり、さらに未来へつながっていくことに触れ、大項目B以降では、歴史を学ぶことを通してより良い社会のあり方を構想していくことを伝えた。

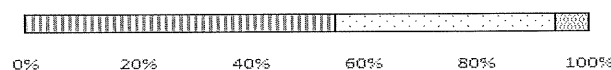
5 研究の成果と課題

本校では7月中旬に生徒による授業評価(設問に対して「はい」「どちらかといえば、はい」「どちらかといえば、いいえ」「いいえ」の四段階評価と自由記述)を行っている。ここでは実践に関わる部分を抜粋した。

設問：意欲的に授業に取り組めたか



設問：授業を受けて、さらに興味・関心がわいたか



□ はい □ どちらかといえば、はい
■ どちらかといえば、いいえ

どちらも肯定的評価が9割以上であり、実践前のアンケートを鑑みれば、本実践が有効であったと考える。自由記述も肯定的なものが多かったが、中には「自分で考えることが多くてついていくことが大変だった」というものがあった。生徒の言葉を受け止め授業の見直しをすることは必要だが、「歴史は暗記のもの」という捉えから脱却しつつあることの裏返しだろう。近現代の資料を扱う際、慎重な判断が必要なものの(本実践においても、口頭では都度補足したが、戦争に対する当時の高校生の意識について掘り下げたり、平和教育の視点を充実させたりするところまで至らなかったことは課題点である)、自校史の活用は、様々な学校でその特色に応じて実践が可能である。従って本実践は、今後の歴史教育の充実の一助となるものだと考える。

参考文献等

- ・『昭和16年度 小牛田農林 卒業アルバム』(1942)
- ・『宮城県小牛田農林高等学校創立130周年記念誌』宮城県小牛田農林高等学校(2018)
- ・『高等学校 歴史総合』第一学習社(2022)
- ・『朝日新聞に見る日本の歩み 一破滅への軍国主義III—』朝日新聞社(1974)